

国東半島の鬼会面*

—形態による分類(2)—

はじめに

国東半島の仮面は、鬼会面・神楽面・神面・陳道面・菩薩面・能面など多種にわたっており、面数も豊富である。

特に、鬼会面は、国東半島の天台宗系の寺院が壇家の人々と協力して行なう、特異な火祭りの行事に使用する面であり、他ではあまり例を聞かない仮面である。

この火祭りは、「修正鬼会」とよばれる行事で、江戸期には、国東半島の天台宗の寺院のほとんどが、盛んにこの行事を行なっていたようであるから、その全部の寺院の鬼会面が現在残存していれば、膨大な数になると推定できる。

しかし、明治期にはいつてから、この「修正鬼会」の行事は、費用や人員などの不足から急速に衰退し、この行事を現在行なっているのは、天念寺・岩戸寺・成仏寺のわずか三寺である。

そのため、鬼会面を保有する寺院も少なくなっているが、それでも他種の仮面に比べて面数も多く、現在判明しているだけでも九二面(保有寺院十九寺)を数えることができる。

この鬼会面は、また行事の役割の違いに応じて「荒鬼面」と「鈴鬼面」という二種類に分かれており、形態にかなりの相違がある。さきに、筆者は、この荒鬼面と鈴鬼面を区別せず、鬼会面として一

衛藤賢史

括総合して、面の耳・眼・口・牙・角の形態分類を試みた。

そこで、本稿では、まず前回の一次調査に引きつづき、今回の二次調査で判明した鬼会面を、全く同様の方法で形態分類してみる。

さらに、章を設けて、新たな試みとして一次調査・二次調査で判明した、すべての鬼会面を、今度は、荒鬼面・鈴鬼面に分けて、相似する荒鬼面・鈴鬼面を保有する寺院毎の分類と、その保有する面の相似点を述べていくことにする。

(一) 鬼会面を所蔵する寺院の沿革と所有面数

鬼会面を所蔵する寺院は、「修正鬼会」の行事が、国東半島の天台宗系の寺院、俗にいう六郷満山の寺院で行なわれていたので、当然、天台宗の寺院となる。

ここでは、二次調査で訪れた五寺の簡単な沿革と、保有する面数を述べていく。このうち二寺は廃寺となっている。

又、寺院の上につけたアルファベットは、一次調査の寺院に引きつづいての順序にしたので、本報告での寺院は「O」から始まる。

なお、本稿の(三)で、一次調査・二次調査の寺院をあわせて、「相似する鬼会面を保有する寺院の分類」を試みている関係上、表一の「鬼会面所蔵寺院一覧表」は、一次調査の寺院もあわせて記載する。これら

P 岩脇寺⁴

豊後高田市大字嶺崎にあつて、現在は廃寺になつてゐる。

六郷満山本山分末寺の一つであつた。

養老二年(七一八)仁聞菩薩の開基と伝えられ、天正十四年(一五八六)薩軍の兵火によつて堂塔をことごとく焼失した。寛永元年(一六二四)浄眼和尚によつて再興されたが往時の勢いをとるもどすことはできなかつたと云われる。

当寺の保有仮面は、現在豊後高田市大字横峯、伊美政雄氏がすべて管理しており、災払鬼面(P-1) 荒鬼面(P-2) 荒鬼古面(P-3) 鈴鬼男面(P-4) 鈴鬼女面(P-5)の五面である。

Q 富貴寺⁵

豊後高田市大字落字坊にあり、六郷満山本山分末寺の一つである。

本尊は、阿弥陀如来で、国指定の重要文化財である。

国東半島では、現在最も有名な寺院であり、大堂は俗に「落の大堂」とよばれ、平安後期の作で日本三阿弥陀堂の一つであり、昭和二十七年(一九五二)国宝に指定された。又、大堂内部の壁画も有名である。

境内には、国東有数の石造美術品も沢山有している。

当寺の保有仮面は、鈴鬼男面(Q-1) 鈴鬼女面(Q-2)、菩薩面の三面である。

R 靈仙寺⁶

西国東郡香々地町大字夷にあり、養老二年(七一八)仁聞菩薩の開基と伝えられる。

六郷満山末山本寺の一つである。

本尊は、千手観音である。

石造彫刻として、万延元年(一八五九)銘の大地蔵像がある。これは、像高が四・八七米、総高六・〇五米の巨大な地藏立像であり、「仏

師・板井林三エ門」の銘がある。

当寺の保有仮面は、災払鬼面(R-1) 荒鬼面(R-2) 鈴鬼男面(R-3) 鈴鬼女面(R-4)の四面である。

S 丸小野寺⁸

東国東郡武蔵町字丸小野にあり、養老二年(七一八)仁聞菩薩の開基と伝えられる。

本尊は、不動明王である。大分以前に当寺は火事で寺院を焼失し、現在地に移つたが、焼失前の当寺の本尊は、薬師如来であつたという。六郷満山中山末寺の一つである。

当寺の保有仮面は、現在武蔵公民館の入口正面に常時展示されており、災払鬼面(S-1) 荒鬼面(S-2) 鎮鬼面(S-3) 鈴鬼男面(S-4) 鈴鬼女面(S-5)の五面である。

(二) 鬼会面の形態による分類と銘・測定値について

本章は、鬼会面の二次調査結果の報告である。

そのため、一次調査とまったく同じ方法¹⁰によつて述べていく。つまり、形態の分類は、鬼会面を荒鬼面と鈴鬼面に分けず、面の各部を、眼・耳・角・口・牙に分け、それぞれを表二の分類結果に従つて述べていく。

銘・測定値も同様の方法をとる。

(1) 眼 部

眼部の形態は、杏仁形・丸形・その他、の三類に分けた。

三類のうちでは、丸形が大多数をしめ、二二面中、二〇面を数える。このうち、荒鬼面が十作例、鈴鬼面が十作例である。

この作例のうちで、西明寺の災払鬼面(O-1) 災払鬼面(O-2) 荒鬼面(O-3) 荒鬼面(O-4) と岩脇寺の災払鬼面(P-1) 荒鬼面(P-2) の六面は、眼部を銅板で張っており、西明寺の災払鬼面(O-2) の場合、右眼の銅張りがはげおちている。又、岩脇寺の二作例には、銅張りのうえに金粉をふいているのがよく残っている。この眼部の銅張りの作例は、一次調査では、胎藏寺の災払鬼面(A-1) 荒鬼面(A-2) の二面にしか見出せなかったが、今回の調査で八面になり、この三寺が近接した場所にあるのは興味深い。

杏仁形は、今回の調査では、一作例もなかったが、丸小野寺の鈴鬼面(S-4) 鈴鬼女面(S-5) の場合、丸形の割り貫きのうえに、濃く黒の杏仁形の彩色をして、一見すると、杏仁形にみえる作りになっている。この二面は、両眼の位置をいびつに彫っており、雑な作りである。

その他は、二作例である。ともに荒鬼面で、丸小野寺の荒鬼面(S-2) 鎮鬼面(S-3) である。この二作例は、眼の位置に直接彫り込まず、やや下部の部分に三ヶ月形の割り貫きをしている。この作例は、一次調査では、岩戸寺の鎮鬼面(H-3)、文殊仙寺の鎮鬼面(I-3) にみることができた。

(2) 耳部

耳部の形態は、紐結形・貼付形・彫込形・耳無形・不明の五類に分けた。

紐結形は、十作例であり、すべて荒鬼面である。このうち、岩脇寺の荒鬼古面(P-3) は、耳を失っているが、面の左右両横に耳を結ぶ小穴を三個ずつ割り貫いているので、紐結形であったと分かる。他の九面は、耳を保有しており、すべて耳の形は、靴べら状の簡単な作りである。一次調査においても、紐結形は、両子寺の荒鬼面(M-6)

を除いて、この形である。「修正鬼念」の行事の際、荒鬼は激しく動く役割であることを考えれば、紐結形の耳をもつ荒鬼面は、簡単な靴べら状の耳を有している方が、耳を失うことを防ぐ合理的な方法であると推定できることから、この靴べら状の簡単な耳の作りが、紐結形の一応の定型と考えてよいと思われる。

貼付形は、今回の調査では一作例もなかった。

彫込形は、三作例であり、このうち、荒鬼面が二作例、鈴鬼面が一作例である。荒鬼面は、西明寺の災払鬼面(O-1) 荒鬼面(O-3) であり、二面とも、左右の耳を彫り込んだ部分が別材を使用している。この作例は、一次調査では一作例もなく、特異な作例である。鈴鬼面は、靈仙寺の男面(R-3) である。鈴鬼面に耳があるのは、一次調査でも、胎藏寺の男女面(A-3・4) と行入寺の男女面(L-7・8) だけであり、それも男女セット面に耳を彫り込んでいる。靈仙寺の場合は、男面だけに耳を彫り込んでおり、セット面の片方だけに耳があるという特異な例となっている。

耳無形は、九作例であり、すべて鈴鬼面である。

(3) 角部

角部の形態は、二本角形・一本角形・二又角形・無角形・不明の五類に分けた。

二本角形は、今回の調査では一作例もなかった。

一本角形は、四作例であり、岩脇寺の荒鬼面(P-2) は、角の長さが四二・二cmもあり、本体の面長よりも長い大きな角であり、黒の彩色に金線を施す見事な作りである。

二又角は、三作例であり、すべて正面にむかって二又に分かれています。このうち、岩脇寺の災払鬼面(P-1) は、大角の長さが三九・五cm、小角の長さが二三cmで、角の根元を赤色、上部を金色に塗った

見事に大きな角である。

無角形は、十三作例であり、そのうち、荒鬼面が三面、鈴鬼面は形態上、角を有していないので十作例すべてである。荒鬼面のセット面すべてが無角形であるのは、靈仙寺の荒鬼面（R-1・2）である。

不明は、二作例であり、丸小野寺の荒鬼面（S-2）、岩脇寺の荒鬼面（P-3）である。二面とも、額部の中央に、角を差し込む四角な小穴をみるので、無角形ではなく、角を有していたことが分かる。

(4) 口 部

口部の形態は、阿形・吽形・不明の三類に分けた。

阿形は、八作例であり、そのうち、荒鬼面が三作例、鈴鬼面が五作例である。

吽形は、十四作例であり、そのうち、荒鬼面が九作例、鈴鬼面が五作例である。丸小野寺の鈴鬼男面（S-4）の場合、すこし口元が開いており阿形にみえるが、歯をしっかりとかんだ作りになっているので吽形の方に分類した。

なお、一次調査では、鈴鬼面は、男女面のセットがすべて阿形か吽形のどちらかに統一されていたが、この二次調査では、西明寺の鈴鬼面（O-5・6）、岩脇寺の鈴鬼面（P-4・5）、靈仙寺の鈴鬼面（R-3・4）が阿形と吽形にそれぞれ分かれており、鈴鬼面のセットは阿形か吽形に統一されているという定型はないことが分かった。

(5) 牙 部

牙部の形態は、上下牙出形・上牙出形・下牙出形・牙ナシ形・不明の六類に分けた。

上下牙出形は、八作例である。荒鬼面のセットが、この形を有する面をもつ寺院は、岩脇寺（P）、靈仙寺（R）である。西明寺の災払鬼面（O-1）、荒鬼面（O-3）の二面は、上下の歯がすべて大きくて鋭い上がった牙状をなしており、左右両脇の口元から、さらに大きな上下の牙をもつ、全部・牙であるといつてもいいような特異な形である。又、靈仙寺の災払鬼面（R-1）は、左上牙が欠けており、右上牙も半分から折れており、荒鬼面（R-2）は、左上下牙が欠けている。この欠けた牙の根元は差し込みの小穴があり、牙のみを別材で作ったことが分かる。

上牙出形は、二作例であり、丸小野寺の災払鬼面（S-1）、西明寺の荒鬼面（O-3）は、上の歯をむき出した形に彫っていて、下の歯を彫っておらずユーモラスな表情になっている。

下牙出形は、一作例であり、岩脇寺の荒鬼面（P-3）である。

牙ナシ形は、十一作例あり、このうち、荒鬼面が一作例、鈴鬼面は形態上、牙を有していないので十作例すべてである。なお、西明寺の災払鬼面（O-1）は、口元の両脇から牙状の大きな歯を上下からだしているが、先端を切って、他の歯をそろえており、このため、牙ナシ形に分類した。

(6) 墨 銘

今回調査した二二面のうち、墨銘を有しているのは七面である。

大別すれば、作者銘を書いたもの、年代銘を書いたもの、発願主や発起人などを書いたものの三つに分けられる。

作者銘を記銘している面は、靈仙寺の荒鬼面（R-2）の一面であり「正月五日開眼ナリ、佛師板井徳四良国吉」とあり、これは、先述した靈仙寺の大地蔵像の作者「板井林三エ門」や、一次調査でみられた長安寺の災払鬼面（B-1）など七面の作者「板井春哉」「板井国光」

と性が同じであり、注目に値する。

年代銘を記銘してある面は、五面である。そのうち、四面は靈仙寺の災払鬼面（R-1）荒鬼面（R-2）鈴鬼男面（R-3）鈴鬼女面（R-4）で、すべて「嘉永六年（一八五三）」の銘である。他の一面は、西明寺の荒鬼面（O-3）であり「明治十三年（一八八〇）」の銘をもつ。

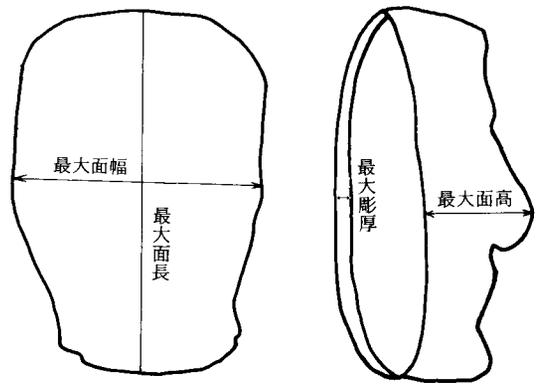
発願主・発起人ほどの銘をもつ面は、五面であり、靈仙寺の災払鬼面（R-1）の「大施主堂園、村長隈井元右エ門節、矢野末吉、同名藤元、同性瀧平」、荒鬼面（R-2）の「大施主鎌治迫、庄屋隈井元右エ門節、猪股富藏、同治三良、同清三良」、鈴鬼男面（R-3）の「大施主堂園、矢野末吉、同名藤元、同性瀧平」、鈴鬼女面（R-4）の「大施主鎌治迫、猪股富藏、同名治三良、同名清三良」となっており、四面とも同文で「文明三ヨリ嘉永五子年迄三百八十二年ニナル嘉永、六五年調形之法印賢廣代」の銘をもつ。あと一面は、西明寺の荒鬼面（O-3）で「豊後國速見郡野原邑、帯刀久六・六十年、同國同郡同邑何拾浦吉紀昌盛・五十二年」の銘をもつ。五面の他に、富貴寺の鈴鬼女面（Q-2）も、面裏の両側に墨銘をもつが、肉眼では判読不能の状態であり、わずかに右側の「鬼」と「願主」の銘と、左側の「正」の銘が読める程度であるので、この分類からはずした。

(7) 測定値

鬼会面の測定値は、最大面高、最大面幅、最大面高、最大彫厚、重量の五類に分け測定した。（単位は、センチ・キログラム）

測定方法は、一次調査とまったく同じ要領で行なった。（挿図2）

それによると、二次調査分の面だけによる、最大面長は、荒鬼面の平均が三一・一cmであり、個別的には、岩脇寺の災払鬼面（P-2）の三六cmが一番長い。この面は、前章の角部で紹介したように角の長



挿図2 鬼会面の測定図

さも三九・五cmあり、総計すると七五・四cmの面となり、一次調査の胎藏寺の災払鬼面（A-1）の角・面を加えた七二・五cmを上回る最長の面である。又、一番短かい面は、靈仙寺の災払鬼面（Q-1）の二六・六cmで、これは荒鬼面の平均をかなり下回る。

鈴鬼面の平均は、二一・一cmであり、個別的には、靈仙寺の鈴鬼男面（Q-3）の二三・一cmが一番長く、岩脇寺の鈴鬼女面（P-5）の一六・六cmが一番短かい。一次調査では、神宮寺の鈴鬼女面（K-5）の十七・三cmが一番短かったので、岩脇寺の面は、それを下回る面である。

最大面幅は、荒鬼面の平均が二三・九六cmである。個別的には、岩脇寺の荒鬼面（P-2）の二九・七cmが一番面幅が大きく、靈仙寺の災払鬼面（Q-1）が二一・二cmで一番小さい。

鈴鬼面は、平均が一五・〇七cmである。個別的には、靈仙寺の鈴鬼男面(Q-3)、西明寺の鈴鬼面(S-6)の十六・四cmが大きく、丸小野寺の鈴鬼女面(S-5)の十二・六cmが小さい。

最大面高は、荒鬼面の平均が十五・二九cmであり、個別的には、岩脇寺の災払鬼面(P-1)の十八・五cmが一番面高があり、靈仙寺の荒鬼面(Q-2)の十一・五cmが一番低い。

鈴鬼面は、平均が八・二五cmであり、個別的には、西明寺の鈴鬼面(O-5)の九cmが一番高く、丸小野寺の鈴鬼女面(S-5)の六・五cmが一番低い。

最大彫厚は、荒鬼面の平均が二・五八cmであり、個別的には、岩脇寺の災払鬼面(P-1)、西明寺の荒鬼面(O-4)の三・五cmが一番厚く、靈仙寺の災払鬼面(Q-1)、荒鬼面(Q-2)の一cmが一番薄い。

鈴鬼面の平均は、一・〇八cmであり、個別的には、丸小野寺の鈴鬼男面(S-4)の一・七cmが一番厚く、靈仙寺の鈴鬼女面(Q-4)の〇・七cmが一番薄い。

重量は、荒鬼面の平均が一・四二kgであり、個別的には、岩脇寺の災払鬼面(P-1)、荒鬼面(P-2)の三kgが一番重く、靈仙寺の災払鬼面(Q-1)の〇・四kgが一番軽い。靈仙寺の二面は、明きらかに材質が桐と分かり、そのためにこのような軽さになると思われる。

鈴鬼面は、平均が〇・二四cmであり、十面のうち、〇・三kgの重さをもつ面が四面、〇・二kgの重さをもつ面が六面であり、ほとんど重量差がない。なお、個別的には、表二の「測定値表」を参照されたい。

(三) 相似する鬼会面を保有する寺院の分類

前章で述べた、鬼会面の二次調査の報告と、前回の一次調査をあわせる、鬼会面を保有する寺院は十九寺、面数は九二面(荒鬼面五六

面、鈴鬼面三六面)になる。

今後の調査で、もう少し保有寺院・面数も増えると思われるが、本章では、これまで調査した鬼会面で、新たな試みとして、相似する鬼会面を保有する寺院の分類を試みてみたい。

「修正鬼会」の行事は、荒鬼と鈴鬼では演ずる役割が違うので、当然、面の形態も違ってくる。そこで、この分類も「荒鬼面」と「鈴鬼面」に分けて考察することにした。

分類方法は、両面とも①面全体の作りがよく似ており、②部分的には、少くとも、三つ以上の共通する彫り方、作り方のある、③セット面を保有する寺院である。

まず「荒鬼面」である。この三つの条件を満たす寺院別の分類は、今回は、四グループに分けられたが、どうしても条件にあわず、やむなく除外した寺院もでた。これは、両子寺や西明寺のように、どうも他寺の荒鬼面を併せて保有していると思われるのであるが、面の形態が全然違う種類を有する寺院や、一面ないしは二面はあてはまってもセット面全部があてはまらない面を保有する寺院などである。

なお、荒鬼古面は、分類の調整上、今回は除くことにする。

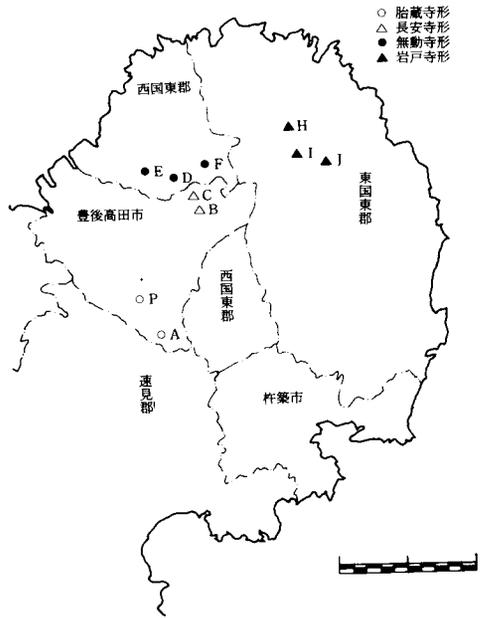
次に、「鈴鬼面」であるが、やはり、四グループに分けられた。この鈴鬼面の場合、①の条件を重視して分類してみたので、荒鬼面に比べて除外する寺院が少なくなったが、それでも多少は、やむなく除外した。

以下、この方法に従って、相似する荒鬼面・鈴鬼面を保有する寺院別の分類を試みていく。

(1) 相似する荒鬼面を保有する寺院別の分類

相似する荒鬼面を保有する寺院を大別すると、次の通りである。

第一群



挿図3 相似する「荒鬼面」を保有する寺院別の所在地

胎藏寺 (A)、岩脇寺 (P)

第二群

長安寺 (B)、天念寺 (C)

第三群

無動寺 (D) 応曆寺 (E)、弥勒寺 (F)

第四群

岩戸寺 (H)、文殊仙寺 (I)、成仏寺 (J)

なお、これらの四群の所在地については、挿図3を参照されたい。

① 第一群

第一群に属する荒鬼面を保有する寺院は、胎藏寺 (A-1・2) 岩脇寺 (P-1・2) である。

この形を、便宜上、仮に胎藏寺形と名付ける。

胎藏寺形に共通する面の彫り方の特色のうちで、最も顕著な相似個所は、眼部に銅板を張っていることである。大きな丸形の少しつり上がった眼部に銅板を張り、そのうえに金色の彩色を施した中に、丸形の割り貫きをもつ。

さらに、頬部は、厚く肉を盛り上げたような彫り方をして、ふくらみをもたせている。

耳部は、紐結形で、簡単な靴ペラ状の作りである。

角部にも、共通した特色があり、ほぼ面長に匹敵する長さを有する大角である。

総じて、面が、最大面長三〇cmをこす大面であり、各部の彫りも深く、少し角張った形に仕上げた丁寧な作りである。

この胎藏寺形に類似した面に、西明寺の災払鬼面 (O-2) 荒鬼面 (O-4) がある。

② 第二群

第二群に属する荒鬼面を保有する寺院は、長安寺 (B-1・2) 天念寺 (C-1・2) である。

この形を、便宜上、仮に長安寺形と名付ける。

長安寺形に共通する面の彫り方の特色は、まず、牙部である。上下牙出形をとり、大牙である。そのため、歯に相当する部分も、他の荒鬼面の牙ぐらいの大きくなり、先端も鋭くかつがっている。

又、鼻部は、小鼻の部分が大きく横に張った作りをしており、正面からみると、両眼の三分の二程度まで張りだした横広の大きな鼻になっている。

さらに、面上の額部、頬部、顎部にきざまれた文様上の彫り方の相似性も特長の一つである。額部には、眉間を中心に両脇にのびる三角状の線刻を施し、眉部は二つの渦巻状の彫り方で眉を形づくり、頬部

から鼻部へも、曲線をえがいた細かい線刻をもち、顎部には、一つないし二つの渦巻状の円形の彫りがある。

面の形は、頭部が大きく、顎部が細く角張った逆三角形状であり、一見して動物を思わせる表現である。

この長安寺形と胎藏寺形の間を思わせる面に、西明寺の災払鬼面(O-1) 荒鬼面(O-3) がある。この二面は、顎部に二つの渦巻状の円形の彫りがあり、この彫り方は、長安寺形以外には例がなく、何らかの関連性が推定される。

◎ 第三群

第三群に属する荒鬼面を保有する寺院は、無動寺(D-1・2) 応曆寺(E-1・2) 弥勒寺(F-1・2) である。

この形を、便宣上、仮に無動寺形と名付ける。

この無動寺形に共通する二面の彫り方の特色は、まず、面全体の比率からいって、少さめの眼部である。他の荒鬼面は、おおむね眼部を大きく作ったり、側面からみた場合、最大面高に匹敵するほど突起させ全体的な比率からみると眼部を強調した作りが多いのに比べると、眼部の作りは小さく、バランスがとれている。

また、顎部は、応曆寺の災払鬼面(E-1) のみは、下顎が欠損していて不明であるが、他の面は、すべて下顎部を少し前に突き出した作りになっている。

さらに、額部から頬部にかけて、さざ波状の細かい円を畿筋もえがいたような文様状の彫りをしているのも共通した特色である。

総じて、面の形は丸形であり、各部の彫りも深く、丁寧に仕上げている。

この形に類似する、他の荒鬼面には、靈仙寺の災払鬼面(R-1) 荒鬼面(R-2) がある。

◎ 第四群

第四群に属する荒鬼面を保有する寺院は、岩戸寺(H-1・2) 文殊仙寺(I-1・2・3) 成仏寺(J-1・2・3) である。

この形を、便宣上、仮に岩戸寺形と名付ける。

この岩戸寺形に共通する面の彫り方の特色は、鼻部である。鼻筋を浅く彫るか、円球状、あるいは魚の背鰭を思わせる突起物で表現しているのが、側面からみた場合、鼻筋はほとんどないような、かなり不細工な作りをしている。

次に、口部である。この部分も彫りが浅く、歯の作りもはつきりせずよく観察しないと分からない。そのため、牙部の作りも雑になつており、他の歯よりも少し長目に彫っているのが歯と分かる作りである。また成仏寺の荒鬼面(J-1・2・3) はさらに簡略化され、口部は彫らずに、口元を黒、歯を白の彩色で仕上げている。

また、この岩戸寺形の際立つて違ふところは、彩色である。面全体を白と黒のみの簡単な彩色ですませており、黒色を下地の色として、眉部・眼部・口部などに白色の彩色をしている。文殊仙寺の荒鬼面(I-1・2・3) は、黒の彩色は現在残っていないが、眼部・口部に白色の彩色があり、同様の彩色と考えられる。

総じて、面の形に統一性がなく、彫りも浅く、他の荒鬼面に比べて仕上がりが大雑把である。

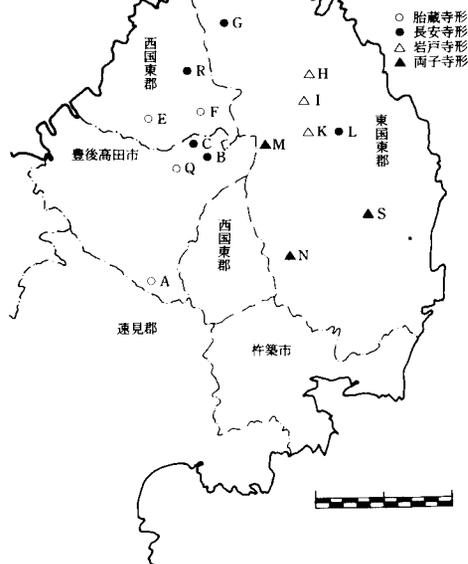
この岩戸寺形に、比較的類似する荒鬼面に、丸小野寺の災払鬼面(S-1) 荒鬼面(S-2) 鎮鬼面(S-3) がある。

(2) 相似する鈴鬼面を保有する寺院別の分類

相似する鈴鬼面を保有する寺院を大別すると、次の通りである。

第一群

胎藏寺(A)、応曆寺(E)、弥勒寺(F)、富貴寺(Q)



挿図4 相似する「鈴鬼面」を保有する寺院別の所在地

第二群

長安寺(B)、天念寺(C)、千灯寺(G)、行入寺(L)、靈仙寺(Q)

第三群

岩戸寺(H)、文殊仙寺(I)、神宮寺(L)

第四群

両子寺(M)、瑠璃光寺(N)、丸小野寺(S)

なお、これらの四群の所在地については、挿図4を参照されたい。

(a) 第一群

第一群に属する鈴鬼面を保有する寺院は、胎藏寺(A-3・4) 応曆寺(E-3・4) 弥勒寺(F-3・4) 富貴寺(Q-1・2)である。

この形を、便宜上、仮に胎藏寺形と名付ける。

胎藏寺形に共通する面の彫り方の特色は、すべて能面の表情を思わせる作りになっていることである。

このうち、応曆寺の鈴鬼女面(E-4)の眼部の作りは、杏仁形の削り貫きをしているが、他の鈴鬼面は、杏仁形状の眼部に、黒眼の部分を丸形の削り貫きをしている。

口部は、すべて阿形であり、応曆寺の鈴鬼女面(E-4) 弥勒寺の鈴鬼女面(F-4)を除いて、歯を出した作りである。

総じて、面の表情は無表情であり、照明の工合によって、いかようにも表情が変化するような作りになっている。

この胎藏寺形に、類似した鈴鬼面に、西明寺の鈴鬼面(O-5・6) 岩脇寺の鈴鬼面(P-4・5)があるが、ともに面の形が横広であり除した。

⑤ 第二群

第二群に属する鈴鬼面を保有する寺院は、長安寺(B-4・5) 天念寺(C-3・4) 千灯寺(G-3・4) 行入寺(L-7・8) 靈仙寺(R-3・4)である。

この形を、便宜上、仮に、長安寺形と名付ける。

この長安寺形に共通する面の彫り方の特色は、人間の顔をモデルにしたと思われるような写実的な表情の作りになっていることである。

まず、面の形は、卵形のふっくらとした丸顔風の作りであるが、そのうち、天念寺の鈴鬼面(C-3・4)が一番丸く、千灯寺の鈴鬼面(G-3・4)は、やや細長い。

眉部は、彫り出しておらず、大きく孤をえがいた形に墨をいれてある。

鼻部は、鼻筋が通り、小鼻も小さく、人間の鼻の表現に近い。

又、口部は、ほぼ小鼻の作りと同じぐらいの幅に彫り、唇の部分に

朱をさしている。

総じて、眼部、鼻部、口部など各部分の作りが小さく、各部とも誇張のないバランスのとれた表現に仕上げている。

なお、千灯寺の鈴鬼男面（G-3）は、少し眉をつりあげ、黒眼の部分を眉間によせた作りであるので、丁度、歌舞伎で見得を切ったような表現である。

◎ 第三群

第三群に属する鈴鬼面を保有する寺院は、岩戸寺（H-3・4）文殊仙寺（I-4・5）神宮寺（K-4・5）である。

この形、便宣上、仮に岩戸寺形と名付ける。

岩戸寺形に共通する面の彫り方の特色は、鈴鬼男面がヒョットコ形、鈴鬼女面が、多少笑顔をもせている口元の形に作っていることである。鈴鬼男面の場合、彩色、文様状の彫り出しなどに相異もあり、眼部も、岩戸寺男面（H-3）神宮寺男面（K-4）は杏仁形、文殊仙寺男面（I-4）は丸形と違うが、三面とも、口部はヒョットコ形であり、鼻部と口部を正面からみて、すべて左側の部分をつりあげた作りになっている。

鈴鬼女面の場合、文殊仙寺女面（I-5）神宮寺女面（K-5）はオカメ形で、眼部を丸形にし、鼻部は正面からみた場合、鼻筋があまりなく鼻の穴がみえるような作りであり、岩戸寺女面（H-4）、眼部を杏仁形、鼻部は鼻筋も通り、小鼻も小さく作っているが、口部は三面とも、下唇の部分を少しきだすように厚めに作り、口元をつりあげた作りにして、面の表情が笑顔をもせている仕上がりである。

なお、成仏寺の鈴鬼面（J-4・5）は、岩戸寺の鈴鬼面と彩色の方法が酷似しているが、面の形が違うので、今回は除した。

④ 第四群

第四群に属する鈴鬼面を保有している寺院は、両子寺（M-7・8）瑠璃光寺（N-6・7）丸小野寺（S-4・5）である。

この形を、便宣上、仮に、両子寺形と名付ける。

両子寺形に共通する面の彫り方の特色は、面の形が楕円形であり、比較的、写実性のある表情の作りになっていることである。

この楕円形の作りのため、鼻部に共通する特色、鼻筋を非常に長く彫った作りになっている。

眼部は、丸小野寺の鈴鬼面（S-4・5）を除いて、杏仁形の割り貫きをしているが、丸小野寺の場合、割り貫きは丸形であるが、墨を濃く塗りこんだ杏仁形状の眼部にしている。

また、顎部が、他の鈴鬼面に比べて、この両子寺形は長い。

なお、丸小野寺の鈴鬼面は、面の形がいびつであり、眼部も左右の位置が違っており、大雑把な仕上がりである。

むすび

以上、二次調査で判明した五寺二面の鬼会面の形態分類と、一次二次調査で判明したすべての寺院の、相似する荒鬼面・鈴鬼面を保有する寺院別の分類を試みてみた。

その結果、面を耳・眼・口・牙・角の各部に分けての形態分類では、荒鬼面・鈴鬼面とも固有の定型をみつけるまでにいかなかった。

しかし、この方法を通じて、西満山に属する寺院の保有する荒鬼面・鈴鬼面は、面の形が端正で、総体的に彫りが深く、胎藏寺形にみるように眼部に銅板を張ったり、長安寺形のように文様の彫り出しが複雑であったり、牙部も概して大きく鋭い作りをするなど、丁寧で、きれいな仕上がりであるのに比べて、東満山に属する寺院の保有する面は、総体的に彫りが浅く、成仏寺の鬼会面のように彫りこまず彩色で表現

したりするなどの簡略化の傾向にある。又、丸小野寺の鈴鬼面のように形がいびつであったり、眼の位置が左右ずれているなど大雑把な仕上がりを見せており、西満山と東満山とは、明らかに鬼会面の製作方法に相異があることが分かる。

又、この分類方法を基礎として試みた、相似する面を保有する寺院別の分類では、分けられた寺院群が、「荒鬼面」の場合は、かなり近い地域に位置しているが、「鈴鬼面」の場合、特に長安寺形が非常に広い分布を示しており、この両面は分けて考察することを示唆する。

まだ、これは方法論に一考の余地があると考えられるので、さらに今後考察をつづけていきたい。

註

*本稿は、別府大学付属博物館の昭和五十五年度研究活動「国東半島の仮面」研究分担者として分担した分野に関する中間報告的な私見である。

(1) 『別府大学紀要』第二号（一九八〇年一月二十五日刊・別府大学会）所載の拙稿。

(2) 速見郡教育会『豊後速見郡史』（昭和四十八年）328頁。

(3) 当寺にある荒鬼面はO-1・3、O-2・4が同形であり、O-3に「明治十三年」の銘があるところから、西明寺の廃絶が明治元年であるので、O-1・3を他寺の面と推定してよい。又、鈴鬼面は形が非常に似ており、男面と女面の区別ができなかった。

(4) 豊後高田市編集委員会『豊後高田市明治百年』（昭和四十三年）808頁。

(5) 前註④の315頁。

(6) 筆者が、当寺を調査した際の聞き書きによる。

(7) 記銘には「安政七年」とあるが、この年号は存在しない。地方の場合、新年号にはいっても伝播が遅く、旧年号を延長して使用することがある。

この場合「万延元年」が年号的に正しいと解釈した。

(8) 筆者が、当寺を調査した際の聞き書きによる。

(9) 災払鬼面のところは、武蔵町公民館では「大國鬼面」と説明がついてい

たが、鬼会面では、このような名称はなく、俗称にも聞かない。筆者の調査の結果、他の荒鬼面との比較から災払鬼面とした。

(10) 前註⑨の拙稿、50頁。

(11) 前註①の拙稿、56頁。

(12) 江戸期以前の「修正鬼会」に関する資料は乏しい。この年号銘は貴重な資料の一つと考えられる。

(13) 大分県教育委員編『六郷満山関係文化財総合調査概要―豊後高田市・真玉町・香々地町―』では、この鈴鬼面の年号銘を「久安三年（一一四五）云々」とよんでいる。51頁。

(14) 荒鬼古面は、寺院の保有する他の荒鬼面とかなり形態に違いを生じている。これをセット面の分類にいれると混乱を生ずるので、今回は分類上から除いた。

(15) 「鬼会面所蔵寺院一覧表」の寺院のうえにつけたアルファベットの早い寺院を、その仮称とした。

表二 形態による分類と銘、測定値表

	形態による分類					墨 銘		測 定 値							
	(眼部)	(耳部)		(角部)		(口部)		(牙部)		重 量	最 大 厚	最 大 高	最 大 幅	最 大 面 積	
	杏丸その他 形	紐貼形 形	彫付形 形	ナシ明 形	不本角 角	二角 角	一角 角	不阿形 形	呼不 形						上下 出
O-1	○		○		○		○		○	明治 13 (1880) ○	29.7	24.3	15	3	1
2	○	○			○		○		○		28.7	22.4	15.3	3	1.1
3	○		○		○		○		○		29.3	25.5	3	1	
4	○	○			○		○		○		29.2	22	14.6	3.5	1.3
5	○			○			○		○		21.9	15.7	9	1	0.3
6	○			○			○		○		21.9	16.4	8.6	1	0.3
P-1	○	○			○		○		○		34.3	29.7	18.2	3	3
2	○	○			○		○		○		36	29.6	18.5	3.5	3
3	○	○			○		○		○		30.2	21.4	15.7	2	1
4	○			○			○		○		19.8	14.3	8.3	1.3	0.2
5	○			○			○		○		16.6	14.7	8.2	1.5	0.3
Q-1	○			○			○		○		21.7	16.2	8.9	1	0.2
2	○			○			○		○		20.1	15	8.4	0.8	0.2
R-1	○	○			○		○		○		26.6	21.2	11.7	1	0.4
2	○	○			○		○		○		29.7	21.8	11.5	1	0.5
3	○		○		○		○		○	23.1	16.4	7.9	0.8	0.2	
4	○			○			○		○	22	15.7	8.4	0.7	0.2	
S-1	○	○			○		○		○	37.6	25.2	18.1	2.5	1.7	
2		○			○		○		○	30.7	22.1	16.3	2.5	1.6	
3		○			○		○		○	31.7	22.3	13.1	3	1.4	
4	○			○			○		○	22.3	13.8	8.3	1.7	0.3	
5	○			○			○		○	21.4	12.6	6.5	1	0.2	
										嘉永 6 (1853) ○					
										板井国吉 嘉永 6 (1853) ○					
										嘉永 6 (1853) ○					
										嘉永 6 (1853) ○					

胎藏寺形 荒鬼面



(a) 正面



(b) 側面

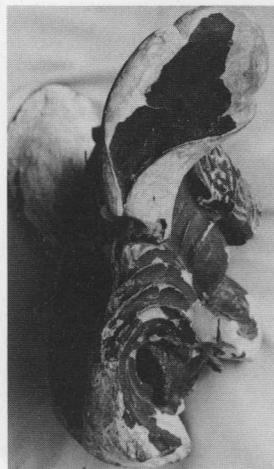


(c) 背面

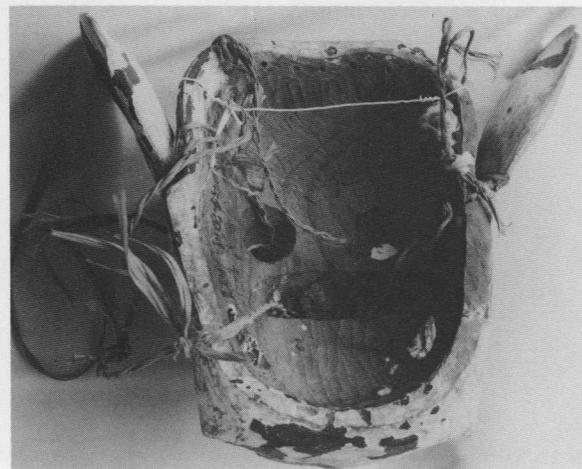
長安寺形 荒鬼面



(a) 正面



(b) 側面



(c) 背面

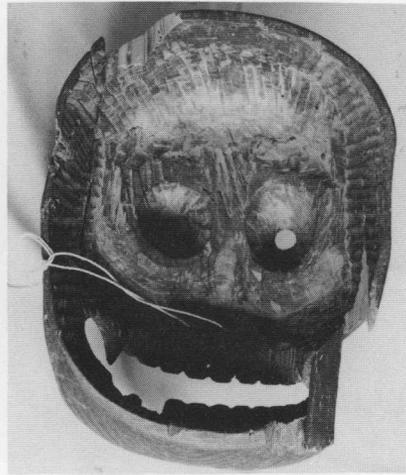
無動寺形 荒鬼面



(a) 正面



(b) 側面



(c) 背面

岩戸寺形 荒鬼面



(a) 正面



(b) 側面

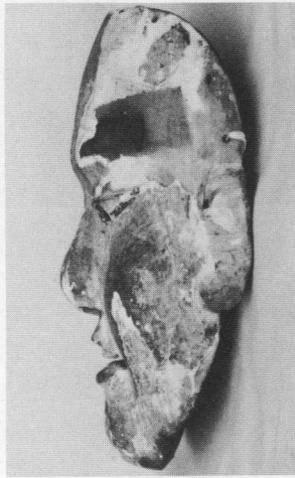


(c) 背面

胎藏寺形 鈴鬼面



(a) 正面

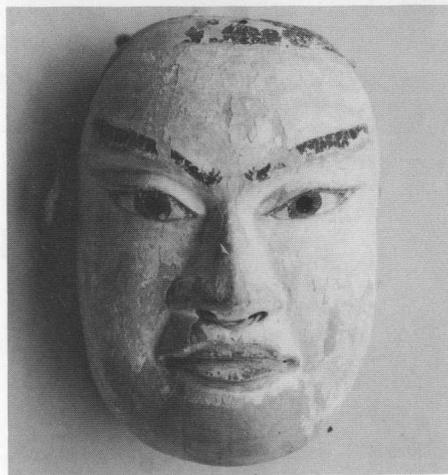


(b) 側面



(c) 背面

長安寺形 鈴鬼面



(a) 正面



(b) 側面



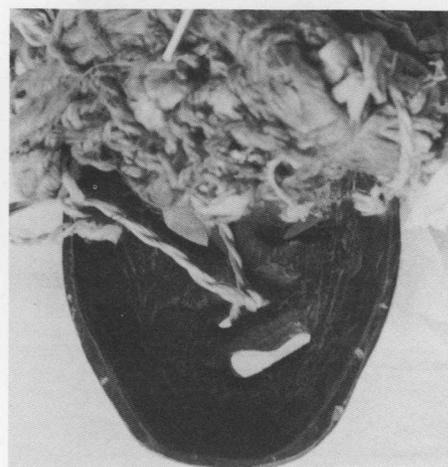
(c) 背面



(a) 正面

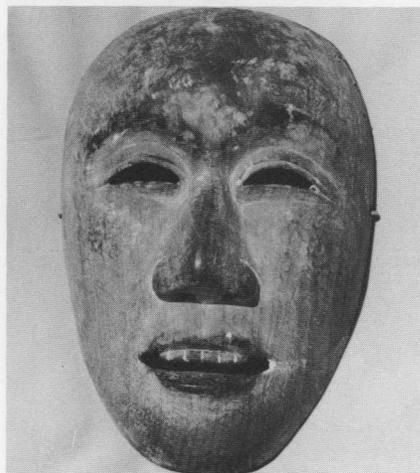


(b) 側面



(c) 背面

両子寺形 鈴鬼面



(a) 正面



(b) 側面



(c) 背面